

中国ビジネスのQ&A

Q: 日中両国は新型コロナ水際でボタンの掛け違いが生じている。そのことで、来日観光客の足が止められ、我々が期待していた「インバウンド利益」はまたも水の泡になってしまった。中国はなぜ「日本が差別的だ」と批判するのか？それに、中国からのインバウンド効果がまだ期待できるのか？郭さんの意見を聴きたい。



A: 率直な質問ですが、両国のビジネス関係者にとっては一大事であるため、率直に答えさせて頂く。

まず、「差別的扱い」。中国政府が指摘したのは、決して「感染急拡大の中国からの入国者に対し厳しい対策を取ってはいけない」ということではなかった。「中国と同等、或いは中国以上に深刻な感染が続いている、しかもXBB.1.55など新種株が急速に拡大している米国に対して、日本は開放し続けているのに」、「日本国内の感染状況も決してよいわけでもなく、ウイルス株も中国と同じであるのに」、ということで「差別的対応」と判断し対抗措置を取ったわけです。

さらに、「ゼロ対策の時に、口うるさいほど、世界経済に打撃を与える、リスクいだから、早めに開放してほしい」と批判を重ねてきたのに、なぜか開放したとたん、「リスクだの、危険だの、世界経済に圧力だの」とまったく違うことを言い出した日本に対する不満の噴出でもある。

日本では、「対抗措置」を取る中国に対する批判も強烈さで負けていないなか、唯一「なぜ（日本が）中国だけに厳しい制限措置？」「中国理解」の声としてぶつけたのは1月16日西日本新聞の記事だ。「北京では、中国人以上に在留邦人から声が上がっている」というのだ。

このくらいで、ご質問のなぜに対する答えとするが…。

さて、インバウンド効果の話に移る。新型コロナ感染期に限らず、効果を期待するのは、おそらく数年前の「爆買い」で残った記憶によるかと思う。

訪問者が変わった、商品自体の魅力も変わった、帰国時の関税も考えると、物売りだけのインバウンドはもう過去になった。

あとはいかに自分の地域に観光客を誘致し、文化或いは体験型消費でお金を落として頂くのかだが、主要観光地以外は期待できない。

さらに重大なボタンの掛け違いがある。日中関係の悪化だ。訪日観光客の回復も、当然、インバウンド効果の期待も遠のくばかりだ。



中国ビジネス現場を見る

★★2023年製造業の勝法は、労働力の確保にある★★

19兆円を超える貿易赤字の現状、国債危機、インフレ圧力、エネルギー高騰…、ここに来て、サプライチェーンの寸断、各国の「門戸閉鎖」…。

この状況は日本に限らず、工業先進諸国のいずれにも共通して改善される見通しにない。各国各界の専門家もそろって悲観的な推測を述べるが、「嵐のような衰退」という表現は誰もが避ける。

しかし、中国経済や産業を封鎖する米国の徹底ぶりを見る限り、米国の家事情がかなり窮していると想像できる。この表現はやがて世界的現実になると考えたほうが妥当だと思う。

では、どうすればいいのか？

貿易赤字は生産活動を制限する主な判断基準となる。産業の自国回帰は流れを成していくだろう。土地・工場・設備などの投資に、各国政府は大きな助成金を出すだろう。「稼ぎがいい」と思われる投資も政府援助の下で争奪されるだろう。しかし、労働力不足問題はどうしても残る。

製造業に限らず、「大回帰時代」を勝ち抜くには、労働力の確保が残される唯一の道になるが、今までのコストパフォーマンスだけの思考では、期待できない。年齢や国籍関係なく、労働者の人間的成長と誇りが検証できるように、生産的なパフォーマンスが求められる。これは、特に製造業の今後にとって、2023年の経営法になるだろう。

★★中国、労働力の輸出国から「働き手不足」国へ★★

「中国人材資源社会保障部」(1/18)は、「働き手が不足している」職業を発表した。100職種に及ぶが、営業・製造ライン・宅配・飲食・商店・家政婦・清掃・警備・包装・旋盤など10の職種がトップ。いずれも「現場人材」だが、働き手不足は深刻さが露わに。別の報道では、「製造業現場では3500万人もの人手不足が認められている」とのこと。

中国は労働力の輸出国から転落し、働き手不足が顕在化しているのだ。

日本は「ほかの国から導入する」方向へ傾いているが、諦めは早すぎる。人件費削減目的に囚われず、労働者の能力や実績、さらに生活に対する当たり前の期待に答える雇用を行えば、いまでも優秀な現場人材が確保できる。人件費削減目的だけでは、どの国からの人材確保もいつか行き詰まるだろう。



中国人の癖 & 日本人の根性

No.89 「俗」化する中国人と「道」化する日本人



日本滞在 30 年余り、多くの見聞の中で、最も目に耳に入るのは、漢字の「道」だ。茶道・華道・書道・武道のような伝統的な「道」のほかに、ここ数年、ギョーザ道、漫画道、掃除道…など、現代バージョンの「道」が溢れている。なんでも「道」と称すれば、格調高くカッコウよく見られる風潮である。

「経営道」も人気を集める「道」の一つである。ここはまさに行動の思想化そのものだと思う。思想化を否定するつもりはないが、落とし所のない理念、或いはとてつもない遠大な目標は果たして経営（長期短期問わず）に有益なのかと、払拭できない疑問を感じるのだ。不祥事を起こす企業やそもそも詐欺まがいの企業の殆どは、まさにその理念、つまり「道」化、或いは「道」の形式化、されたビジネストークでイメージを膨らませ、聴衆を虜にしている。イメージの膨張はなんでも「道」化する思考習慣の落とし穴を作っている。挙句、「道」と叫ぶ本人自身も「道」の形式化やイメージ化にはまり、「道」を踏み外れしまうことが少なくない。

また、「道」と自称することは、「格調の高さ」を追い求めるゆえ、「格調の低い」ものとの告別をも意味する。ビジネス行為に伴う生臭さ、泥臭さ、面倒臭さ、いやらしさを敬遠する意味での「格調」はなお有害であろう。幾度もこのような「道場」を目にしたことがあるが、「道」に興奮して「術」を失するような思いも残念ながら幾度もあった。

さて、中国人はどうだろう？私自身の経験でいえば、「術」に止まっている、或いは「術」だけにこだわっているように思う。例えば、茶道も華道も中国語では殆どの場合「茶芸」と「華芸」と昔のままで表現が変わらない（ここ数十年、日本文化の影響によって道と称することもある）。書道も「書法」と言い、「書のやり方、書の形式」を意味するだけ。武道となると、なおさら。「武には道などがあるわけがない」から、いまだに「武術」という語が使われている。ギョーザ道やら漫画道やら掃除道などとなると、なお「術」の域にあったほうがいいと考えているから、術は「俗」化する現象として見られる。

だから、巷の中国人はあまり行為を思想化しない。道は道、術は術。まったく別の世界にあるわけではないが、「道」で「術」を化粧することはしない。その反面、術の域に止まり、格調が感じられない時が多い。雇用はその一つである。労使双方における不信は大体雇用に「道」が欠如しているからだと思う。

ここ数年中国人も様々な「道」を発明し自らを道に嵌めようとしている。

日本中国ビジネス情報誌 第 289 号 2024 年 02 月号

有限会社尚道日中ビジネス空間

中国漫歩

貴社の中国力を BACKUP します

尚道生活環境科技(大連)有限公司
尚道雅購商貿(大連)有限公司
成都華桜出国服務股份有限公司
尚道中部加工技術協同組合(日本)

〒500-8328 岐阜市五反田町 13 番地 TEL 058-253-4433 FAX 058-253-4406

ホームページ <http://www.showdo.co.jp/> E-mail kukan@showdo.co.jp

飛翔



HP より

【2023 年、跳躍の年？】

中国の「十干十二支」暦法では 2023 年は「癸卯年」と言う。癸は 60 年を周期とする最後で、新しい循環に入る「大変化の年」になる。今年は今後 60 年の運命を定める年でもあるというのだ。

さらに、2023 年は閏年で二つの 2 月があり、年に 383 日もある。2024 年の立春日 2 月 4 日もこの 383 日の中に含まれるから、2023 年は立春が 2 回もあるという大変めでたい年だそうです。同じような年を迎えるには 3283 年を待たなければならないのです。

跳躍を象徴する卯と合わせて、今年大きく前進する年になるというのが中国暦法に基づく占いです。

一方、現実界では、中国暦法にある「めでたい」兆しなどはない。「先進諸国」に関しては、景気低迷・金融と債務危機・インフレ高騰・政治不信などがみられる一方、戦後形成された国連中心の協調主義や国際経済利益の生態も破壊寸前にある。これこそが「大変化」を意味するかもしれないが、良き飛躍ができる 2023 年であってほしい。